

今、できることを

《中学生の部 金賞》

牛田中学校一年 大坪 莉子

私が思いを伝えたいのは、小学校の二年間入っていた、合唱部の後輩達です。

コロナの影響で小学校の様々な行事が中止になり、心の整理がつかないまま入学した私。

「何で私達の代だけこんな事になるんだろう。ついてないな……。」「と、後ろ向きな考え方をしていました。

そんな時、私も毎年出場していた合唱コンクールが、中止になったことを知りました。昨年は銀賞だったので、今年は金賞を……と期待していた中での中止。私もがっかりしたし、一生懸命頑張ってきた後輩達はショックが大きいだろうな、と思っていました。

しかし、私は、後輩達が、今できる事を工夫して精一杯やろうと、練習に取り組んでいる事を知りました。その時私は、自分がいやな事ばかり考えていた事に気づかされたのです。

後輩達が明るく頑張っているのを知り、私も元気をもらいました。これからも、その前向きな姿勢を忘れずに、目標に向かってつき進んでほしい、という事を伝えたいです。私も未来のために、今できる事を頑張ります。

心の距離はソーシャルディスタンス

《中学生の部 銀賞》

牛田中学校二年 中谷 翔一朗

四月十二日から六月一日までコロナウイルスの影響で学校が休校だった。僕はその間、一週間に一回ある自主登校でしか友達と会う機会がなかった。二回目の登校で友達と会ったが、あまりしゃべってくれなかった。なのでその日はモヤモヤしながら家に帰り、家に帰ってからも、何か怒らせるような事をしたかと思っただけでいた。

緊急事態宣言が解除され、登校が始まり、僕はその友達に会ってしゃべることにした。だが会話は長くつづかなかった。話題に対する反応が僕のことを嫌いなのかと思うくらい薄かった。

でも、なんとか話をつづけたかったので、

「君との心の距離もソーシャルディスタンスか。」

というと、友達は大きな声で笑ってくれた。

あとから話を聞くと、感染防止のためにあまり人と話さないようにしていたらしい。僕は、友達でも話さなければ伝わらないので、ちゃんと言葉で伝えてほしいと思った。

感謝

《中学生の部 銅賞》

安佐南中学校三年 押谷 悠愛

「ありがとう。」

私には、心からそう言える人がいる。くだらない話も笑って聞いてくれる。困っている時助けてくれる。声をかけてくれる友達がいる。

私は、この友達に大切な事を教えてもらった。それは、感謝する事の重要性だ。二年前の私は、「ありがとう」よりも「ごめん」をたくさん言ってしまった。ある日、

「ごめんよりもありがとうの方がいいな。」と友達に言われた。私は、いつも何かあったら「ごめん」と言ったら良いと思っていた。でも違った。理由もなく謝る事は、相手を不快にさせるかもしれない。一方で、感謝の言葉を伝える事は、相手とうれしい気持ちにさせるかもしれない。実際友達に感謝された時、自分は人の役に立てていたんだと思い、うれしくなった。

今は、新型コロナウイルスの影響で人とコミュニケーションを取りにくくなってしまった。でも、手紙やメールなどで気持ちを伝えることはできる。だから「ありがとう」の言葉を忘れずに、これからも過ごしていきたい。

友へ

《中学生の部 銅賞》

温品中学校一年 朝長 幸穂

親しくしている人。これが辞書に載っていた「友達」という言葉の意味です。今では世界中の大半の出来事がネットなどで検索すると解る時代ですが、人の心の中までは検索できません。私にとって「友達」という言葉の意味は心の支え。生きる中で最も必要な存在です。私はこの作文を書く前に、もしも友達がいなくなったらこの先一人でやっていけるのかというような事を何度も考えました。結論はいつもイエエでした。私は友達がいたから成長できて、友達がいたから今の自分があるんだなと思いました。今年はコロナの影響もあり、友達と会えない状況が続く中で当たり前だった事ができない事を実感し、友達の大切さを再確認できました。当たり前前の事が当たり前前にできる今だからこそ、その事に対するありがたさをより感じます。

私はそんな友達に

「ありがとう。」

という言葉を送りたいです。そしていつかは自分の口から相手へ伝えたいです。

コミュニケーション

《中学生の部 入選》

祇園中学校二年 杉山 里桜

「はあ……」

この緊急事態が発生する前までは、勉強、部活、友達関係にあけくれた日々が続き、何度のため息がこぼれる毎日でした。特に、友達に関しては、気が合う人や苦手な人など、様々な人々がいて、それぞれの人に対する接し方について、疲れたと思うことがありました。

そんな中、この緊急事態が発生し、学年の最後の一カ月が無くなり、休校になりました。同じクラスで過ごす人々との最後の時間が無くなって、本当にショックでした。でも、その時、心の片隅で安心している自分がいました。縛られるものが無くなったからです。でも、この事態が続いていく中で、人とのコミュニケーションが急激に減りました。確かに、誰にも気を使わずに過ごすのは、疲れないかもしれないけど、友とのコミュニケーションの中で、感動や悲しみなど、自分一人では得られない感情があることに気づきました。

久しぶりに登校して、コミュニケーションを取り、会えていないからこそ、改めて友達は素敵だと、心の底から実感しました。

距離を置いて気づいた本当の気持ち

《中学生の部 入選》

広島大学附属東雲中学校三年 中本 凜

中学生になり今までの友達という関係性の意味が少し変わった。それもあって人間関係がうまくいかず、思い悩むことも少なくなかった。誰かに「助けて」と相談するのに抵抗があった私は一人で抱え込んでしまうことも増えた。友達といて楽しいと思える時間がなかったわけではないが、それは私にとってベストコンディションではなかった。

そんな中、数ヶ月も友達に会えない状況になったしまった。友達に会いたいと思う反面、気をつかう必要もなくなり、気が楽だった。

状況も落ち着き、再び学校が始まった。長い時間今まで会えていたはずの友達と会えなくなり、自分の中で気持ちが整理されていたようだ。誰かに嫌われないように、一人にならないようにと自分を自分で苦しめることもなくなった。心から一緒にいたいと思える友達というようにになり、好きな話題を話すようになった。信じられる大切な友達ができたことで、助けてほしいときには素直に頼れるようになった。今、そばで支えてくれていている友達に心から「ありがとう」と言いたい。

コロナに負けるな

《中学生の部 入選》

宇品中学校一年 生徒

三月十九日。まともに練習もしないままむかえた小学校の卒業式。なんだかパツとせず、一瞬で終わった気がしました。本当に最後という実感もなく、ぼんやりとした終わり方。コロナに生活を乱された気がして腹がたちました。

でも一番乱されたのは人間関係。そう、友達のことです。中学校でいろんな人に会うのに、やつと入学かと思つたらもう休校。全てが振り出しに戻った気がしました。

新型コロナウイルス、それは、世の中を大きく変えました。学校にはいけない、お金は入らない、外食もできない。たくさん物を失いました。人の命も。でも、本当に失った物だけでしょうか。家にずっといたとき、支えてくれた人の大切さ。学校に行く第二の理由、いや、一番の理由となっていた友達が、いかに大事なのか。当たり前、普通という言葉の素晴らしさ。どれもお金だけでは絶対に気付けなない事ばかりです。コロナに負けてはいけません。今こそ助け合うときです。互いに感謝して、頑張りましょう！

見えない糸でつながっている

《中学生の部 入選》

牛田中学校二年 数間 美緒

私の親友は、小学校から中学校になる頃に引越してしまって、今までは、お互い学校が大変で連絡があまりとれていませんでした。

そして今、新型コロナウイルスの影響で学校にも行けず：とだいぶ心境が暗かった時のことでした。久しぶりに親友から手紙が送られてきて、その便箋には、驚くほどびっしりと文章が！それを見て私は思わず爆笑。誰とも会えず、勉強もやる気ですで困っていた私はどこかに飛んで、便箋に書かれている「大丈夫？元気？」や、学校での面白話、質問責めなどが書かれている。「希望の便箋」に夢中になっていました。

今、この親友に伝えたいことは、一言しかありません。それは、『有難う』です。手紙で元気がでたこと、頑張ろうと勇気がでたことなど、一言で表せられることが沢山あるからです。会えなくても手紙を通してつながっていられること、それは、手紙を届けてくれる人がいるから。親友に限らず沢山の人に感謝を伝えたいです。ある意味、この親友との機会を作ってくれたコロナには感謝です。

当たり前の日常

《中学生の部 入選》

A I C J 中学校三年 村中 心結

毎朝の「おはよう」や休み時間の高揚感、放課後のざわめきを教えてくれたのは、中学で初めてできた友達でした。

中学校に入りたての頃の私は、新しい地で困惑と不安を抱えていました。失敗するのが怖くて、誰にも話しかけることのできない学校生活の中、彼女は私に声をかけてくれました。その時の驚きと喜びを今でも覚えています。彼女は私と違うクラスでしたが、放課後は毎日迎えに来てくれたり、帰り道におすすめの歌手を教えてくれたり、私を学校中連れ回したり、受け取りきれない程沢山のことを教えてくれました。

「今日、一緒に帰らない？」

言われなくても分かっているのに、彼女も私も放課後になると当たり前のその台詞を待ち望んでいます。

私が今、友達に伝えたいことは感謝です。楽しいこと、嬉しいことを共有してくれてありがとう。悲観的だった私に、最高で当たり前の日常をくれてありがとう。次は私にお返しをさせてね。二人で笑う放課後が大好きです。

大切なもの

《中学生の部 入選》

落合中学校三年 表崎 那菜

「お前とは、もう友達じゃない。」
その言葉が、私を長い間、縛りつけていた。

これは約四年くらい前の話である。いつも一緒に遊んでいた友達から言われた言葉だ。その時から私は、友達を作るのが怖くなった。相手が望んでいることを、しなければいけないと考えたり、また、今日は友達だった人も、明日になれば、友達じゃなくなるかもしれないと思ったからだ。そして、「友達」ではなく、「知り合い」という関係で、とどめるようになってしまった。

あれから月日が経った。あの時以来、本当の「友達」を作れずにいた。そんな時、私と趣味の合う人ができた。その人は私に、

「人はそれぞれ違うし、考えていることも分らない。絶対的な友情もない。だけど、趣味が合ったり、好きな物が一緒とか、そういう人を大事にしていけばいいと思うよ。」

と言った。その言葉に私は救われた。

私はその人に教えてもらったように、絶対的な友情はないが、私の周りにいる人を一人でも大事にしようと思った。

今、友達に伝えたいこと

《中学生の部 入選》

安佐南中学校一年 通山 彩葉

私の友達は、小学一年生の時に仲良くなり、すごく、気の合う友達です。困ったことがあっても、友達に相談したらいっしょに悩んでくれて、どんなことでも、はっきり言ってくれます。私たちは、吹奏楽もいっしょにやっていました。

小学六年生の時、吹奏楽の練習で友達とけんかをしてしまいました。そのけんかは、おたがいの意見が合わなかったことでしてしまいました。その後、結局意見を合わせられず、自分たちの思いで、練習を続けました。でもこのままだといけないので、もう一度しっかり話し合うことにしました。時間をかけ二人の意見がまとまりました。

私はこのけんかから、学んだことがあります。それは、おたがい意見が合わないうことが、いやでけんかをしたわけではなく、自分たちの、パフォーマンスをよくしようと思いついてしまったけんかでした。その結果、すごくいいパフォーマンスをすることができました。私は友達に、このけんかはいろいろなことを学ぶためのけんかだったと伝えたいです。

友達という大切な存在

《中学生の部 入選》

安佐南中学校三年 矢尾 彩華

今年に入ってから聞き慣れない言葉を耳にするようになりました。「新型コロナウイルス」、それは私から「日常」を奪ったのです。

友達の、「おはよう！」という言葉から新しい一日が始まり、「また明日ね。」の言葉で一日が終わる。そんな当たり前の日々が、突然、目の前から消え去ってしまった。友達との何気ない言葉のやりとりが一日の中からなくなるだけで、心が沈むような気持になるとは、少しも思っていないませんでした。

「友達に会いたい。会って、いつもと変わらない言葉を交わしたい。」ずっとそんな事を考えながら、一日一日を過ごしてきました。

学校が再開し、ずっと顔を合わせていなかった友達と再開した時、友達は私に、「また会えたね。元気にした？」と声を掛けてくれました。不安でいっぱいだった私にとってその言葉は、救いの言葉でした。

この事を通して、「人は人に支えられながら生きている」という事や、「友達」という大切な存在に、改めて気付かされました。

去年のクラスメートに伝えたいこと

《中学生の部 入選》

安西中学校二年 松岡 美陽

「さようなら。」この挨拶をこのクラスであと一ヶ月続けたかった。コロナウイルスの影響で一ヶ月早いクラスの終了となった日、号令をかけた私は思った。

一年間を思い出すと色々な思い出が昨日のことのように蘇ってきた。体育祭や文化祭などの学校行事は、練習過程や本番も楽しかったし、とても心に残ったが、何より行事の成功に向けてクラスが一つにまとまって団結していくことがとても嬉しかった。けれど、私が一番心に残っているのは特別な行事ではなく、日々の生活だった。休憩時間に小さなことで笑い合ったり、分からない問題があったら教え合ったり。そんな当たり前のことが心が弾むほど楽しく感じたのは、私の去年のクラスメートのみんなが一人一人の個性を認め、尊重し合ったからだと思う。

休校によって、私にとってこのクラスがとても大きい存在であることが分かった。そして、私に一生心に残る、すばらしい思い出を作ってくれた去年のクラスメートに伝えたい。

「本当に本当にありがとう。」

当たり前のこと

《中学生の部 入選》

古田中学校二年 直原 幸那

当たり前のこと、それが今はできなくなっています。学校の休みも続き、楽しかった職場体験もなくなっていました。いつも学校で楽しく話していた友達ともメールや電話でしか話せなくなりました。

臨時休校中、私はずっと家の中にいました。本来なら、友達と遊んでいた春休みもずっと家の中で、友達のことを思い出すと悲しくなりました。

今は、グループ学習や班の人と一緒に昼食を食べることもできません。ですが、学校に行けて、今はすごくうれしいです。

当たり前のことができなかつた日々は、友達の大切さを教えてくれました。学校に行つて授業を受けられる楽しさを教えてくれました。

たくさんの当たり前のことが当たり前ではない今、世界中の人々がまだコロナウイルスで苦しんでいる今、私は友達に、「今できることを精いっぱい頑張つて、これからも、楽しい学校生活を送ろうね。」と伝えたいです。

気づけたよ、ありがとう

《中学生の部 入選》

祇園中学校二年 沖田 彩夏

いつもなら聞こえてくる友のおはよう。けれどそのいつもはあたり前なんかじゃない。

そのことを私は初めて知った。そして友がいる幸せも同時に知った。大人たちがよく言う

「友達は大切にしなさいね。」という言葉。

私は今までこの言葉の意味のすべてを理解していなかったのかもしれない。大切にするというのは人としてあたり前だと思う。でも意味はそれだけではないのではないか。人によつて感じ方はそれぞれだが私はこうも感じられた。あなたのことを心から信用してくれて間違いを正してくれるすばらしい人達を大切にし感謝しなさい。そうだ。感謝していいのではないか。あたり前の存在すぎて「ありがとう」の五文字さえ伝えられてないのではないか。そう気づかされた。近くにいる人にはなかなか言えないものだ。だからこそ伝えなければいけない。「いつも」注意してくれて、自分の事のように悩んだり喜んでくれて、助けてくれて。ありがとう。心からそう伝えたい。

自分を変えてくれた友達に

《中学生の部 入選》

安西中学校三年 倉 史奈

私はその時とても緊張していました。郊外での他校の吹奏楽部の友達と出たはじめての大きな本番です。私は練習の時は上手くいっていても、本番になるとものすごく緊張してしまうのが私の欠点でした。

本番まであと5分。会場の一階の席は満席でした。「失敗したらみんなに迷惑をかけてしまう：。」気が付くと手足が震えていました。その時です。隣に居た友達が私の肩をポンポンとたたいて、私に「そんなに緊張せんでもいいんよ。私はあなたの方が好きだからもっとと自信を持って。」と言ってくれました。私はその言葉を聞いてとても安心し、本番は大成功しました。その日から私は本番で緊張する事はなくなりました。

今、その友達は私の良い理解者であり、私の大大好きな人です。今は会えていないけれど、もしかた会う機会があつたら「あの時は本当にありがとう。私はあなたのおかげで変わることができました。」と感謝の気持ちをたくさん込めて言いたいです。そしてこれから私と仲良くして行って欲しいです。

私を支えてくれた仲間

《中学生の部 入選》

宇品中学校三年 日山 風花

私は今、中学校で部活を一緒に頑張ってきた六人に伝えたいことがある。

小学三年生から私はバドミントンを習い始めた。続けていくにつれてまだバドミントンを頑張りたいと思い、中学校ではバドミントン部に入部した。同級生は私を入れて七人いた。中一でも中二でも練習は厳しかったけど七人全員で乗りこえることができた。

先輩の引退試合のとき、次の部長は私だと言われた。心配だったけど、副部長と三人で頑張ろうと思っていた。しかし、部員をまとめるのは難しく、悩んでばかりで話し合いをしたり泣いたりしたこともあった。それでも、六人は声をかけてくれたり相談に乗ってくれたりした。うれしかった。だから、今、私を支えてくれた六人の仲間に「ありがとう。」といろいろな気持ちをこめて伝えたい。

七人の思い出は楽しいことばかりではなくぶつかったこともあったけど今、振り返ってみるといい仲間に出会えたと思う。六人のおかげで部長を頑張ることができた。六人には感謝の気持ちでいっぱいだ。

今度は私が……

《中学生の部 入選》

温品中学校一年 河村 芽依

私は、小学生のころクラスの友達とちよつとした誤解でケンカをしてしまいました。そんなとき、私の相談にのってくれたのが、習い事の友達です。

習い事の友達は幼稚園のころから一緒によく遊んでいました。その友達は私の悩みにすぐ気づき、相談にのってくれました。

「そんなことがあったんだ。まずは誤解を解かないとね。」

習い事の友達は、相談した日から毎日、学校での様子などを聞いてくれました。

「大丈夫。そのうち仲良くなれるよ。」

その言葉で私は元気をもらいました。

それから数日後、私は思いきってケンカした友達に、心の中で思っていたことを言いました。ケンカしていた友達も、私が心の中で思っていたことを、素直に受け止めてくれました。今では普通に話す仲にもどりました。

それから中学生になった今、過去の経験を生かし、新しい友達ができました。だから私は習い事の友達に伝えます。

「今度は私が恩返しをするね。」

前を向いて

《中学生の部 入選》

大塚中学校一年 鈴木 和奏

四月から中学校生活が始まりましたが、私は学校にあまり行きたくありませんでした。友達を作るのが苦手だからです。そんなときに学校が休校になり正直ほっとしました。しかし、一つ残念だったのが小学校の頃から楽しみにしていた部活です。私は吹奏楽部に入ろうと思っっています。休校中に吹奏楽コンクールの中止が発表されました。三年生にとっては最後のコンクールなので中止になってどんなに悔しいだろうと思いました。学校が再開し、まちにまった部活体験が始まりました。見学に行くと三年生が一生懸命練習していました。さらに、一年生に優しく声をかけてくれました。私だつたらコンクールがなくなつたのがショックでなげだしそうです。明るく前を向いている三年生の姿を見て、自分はつらいことからあげていたのだと気づきました。

私は小学校の頃に友達があまりできなくてつらかったです。でも中学校生活が始まった今、前を向いてできることを頑張っている先輩達のように、勇気をもつて一歩ずつふみだそうと思います。

罪悪感をバネに

《中学生の部 入選》

矢野中学校三年 吉本 颯希

大会がなくなつた。私が今、悔しいと思えるのは、彼女が私を救つてくれたからだ。

中学一年の夏。怪我で一ヶ月ほど、部活ができなかつた。治療のため毎日のように通院していた私は、見学すら行けなかつた。そのとき先輩たちからは、私が病院に行くと言つて部活をサボっていると噂された。そんな事を噂されていると知つた私は、怖くなつた。数日後、怪我は治つた。けれど私は、部活をサボつた。罪悪感と後悔しかなかつた。どうしようもなくなつた私は彼女にすべてを話した。彼女は、ずっと私のそばにいて信じてくれた。それなのに、サボつた私は彼女に謝らうと思つてゐた。そして彼女は言つた。

「一日サボつた分は颯希の三年間をかけて全力でバレーしてもらうからね！」

私は、あのとき彼女が道をつくつてくれたから、全力でバレーをしている。そして、全力でバレーをしているから悔しいと思えた。残り少ない部活。私は、最後まで彼女のトスである日の罪悪感をバネにスパイクを打つ。

「私は、あなたのトスが打つて、幸せです。」